財団法人　吉野川紀の川源流物語

森と水の源流館

平成22年度　事業活動報告

平成２２年度　主な事業一覧

事業名称	時期	回数	参加数等	概要
交流プログラム				
水源地の森ツアー	4・7・11月	3	31名	「水源地の森」を案内（7月は雨天により変更）
もりみず探険隊	6・10・11・1月	4	69名	自然・歴史にふれる
吉野川紀の川しらべ隊	5・8・11・3月	5	105名	吉野川・紀の川流域の自然・文化・歴史を学習（8月は2回実施）
第9回森と水のワークショップ	7月19日	1	15名	沢登り・原生林の散策
研修等団体別プログラム	4月～3月	9件	148名	団体毎の予約対応
第3回源流まつり	5月16日	1	200名	吉野川を通じた交流と思い出づくり
学校団体受け入れ	通年	78校	—	見学等の受け入れ
出張源流教室	通年	12校	—	県内外への出前教室
ＰＲキャラバン	通年	全23回	—	他の市町村でのＰＲ
第7回 奈良県暮らしと環境フェスティバル	4月3～4日	1	10,000名	水源地の森などＰＲ
平城遷都1300年祭	5月10～30日	1	—	南都銀行CSR活動「森の感謝日」に連携
奈良県営水道展	6月1～6日	1	200名	奈良県水道局へ協力
わかやま環境フォーラム2010	11月27日	1	1,200名	和歌山市民の森ＰＲ
源流人会・シンクタンク				
会員募集	通年	—	120件	個人会員2,000円
会員限定プログラム	4・3月	2	13名	講習会・交流会
シンポジウム「天川（南）に学ぶ自然との共生」	8月25日	1	230名	森林環境教育の体験報告、柏木地区住民のトーク
調査研究				
植生・両生爬虫類等の調査	6・7・9・10・2月	16	45名	植生・両生類等の調査
森林療法予備調査	9月14日	1	5名	唯浜でトライアル・セラピーを実施
底生動物調査	8月	2	6名	後期購入区域調査
いろりばた教室	7・9月	2	6名	東熊野街道フォーラム柿の葉寿司教室
森と水の源流館の管理				
入館者数	通年	—	13,203名	累計13万人
企画展	7・9・3月	3	—	「川上村の自然」「冬金魚展アート展」「川上村の昆虫」
定期メンテナンス及び修繕	通年	—	—	源流の森ブナの機器入れ替え、館内照明のLED化を実施

水源地の森管理				
学習教材の配布	4月～5月	338校	19,748部	奈良県全域・和歌山県の流域市町の全小学4年生に無償配布。
吉野川紀の川ふれあいデー	9月12日	1	250名	吉野川・紀の川流域の団体・事業者との交流
水源地の森守募金	通年	—	296,251円	学習教材製作、「芽吹きの春」等で活用
交流施設の管理				
施設利用者数	通年	—	50名	インターン生・調査者・ボランティアなど
定期清掃及び修繕	通年	—	—	浴室水道の修理ほか、清掃・点検を実施

特別会計				
ミュージアムショップ事業	通年	—	417,984円	書籍や環境商品・自然観察用品などを販売
受託事業：和歌山市民の森づくり	8月～12月	—	38名	和歌山市より受託。森の整備・管理と交流行事（2回）開催
受託事業： 吉野熊野国立公園「五感で学ぼう！」子ども自然体験プログラム	10月9～10日	1	14名	環境省より受託。国立公園の役割の普及啓発。及び山村文化の継承を事業化

その他　川上村環境基本計画推進業務				
"環境貢献先進企業"を川上村に招いて行う学習会	11月19日	1	40名	シャボン玉石けん講演会
子育て世代の主婦を中心とした環境学習会	12月16日	1	4名	川上村の魅力共有と体験
	2月8日	1	8名	
紀の川中流の農業を知る	3月11日	1	26名	和歌の浦の有機食材「ろうほい」への訪問

ダイジェスト

【交流プログラム】吉野川源流「水源地の森ツアー」

川上村が購入し、保全する吉野川源流に残された約 740ha の天然林は、普段は入山を制限しています。森と水の源流館ではこの森を案内する「水源地の森ツアー」を行っています。専門スタッフが同行し、森への負担を考慮して、年 3 回の定例ツアーのほか、対象を水や自然の学習や環境学習、研究等を目的とした団体に限定し行います。いずれの場合も、1 回あたり定員を 20 名程度としています。

入山前に山の神に参り、「水源地の森」を守る趣旨や、山に入る心得を話し、入念な準備運動を行う。

源流の自然や途中にある人工林などについて解説。

小・中学校の森林環境教育での利用ニーズが多様化し、村内はじめ源流人会会員、専門家のブレーンなどの協力を得て実施するプログラムも増加傾向にある。

大学の講義や単位認定の講座、企業の環境担当者・市民団体の勉強会としての利用については、恒例化が進んでいる。また、新規の利用や問い合わせも増加している。

【交流プログラム】もりみず探検隊

川上村には、「水源地の森」以外にも見どころが多くあります。四季折々に見せる旬の風景や自然の産物、産業や歴史、ひとの魅力を織り交ぜた体験プログラムを毎年企画・実施しています。

6／6 「後南朝ゆかりの金剛寺を歩く」
後南朝の史跡を巡るツアーを実施。
村の語り部による解説、郷土料理を楽しみながら金剛寺や住吉神社など村内各所の後南朝史跡を見学した。

6／19 「源流のほたるの夕べ」
ホタルが飛び始める時間まで、村の伝統行事「千本づき」を体験したり、アマゴつかみや郷土料理を楽しんだ。

10／18 「後南朝と木地屋の里を歩く」
後南朝と木地屋の伝説が伝わる高原地区を、地域史研究者と当館の歴史スタッフが案内した。
参加者は郷土料理と秋の景色を楽しみながら散策した。

1／30 「御船の滝　氷瀑ツアー」
毎年恒例となっている凍った滝を見にでかけるツアー。地元、井光地区の施設で暖をとり、郷土料理を味わうことも楽しみの一つとなっている。

【交流プログラム】吉野川紀の川しらべ隊

吉野川・紀の川流域各地をフィールドに、自然観察会や産業・文化の学習会などを行い交流を図ります。将来的には市民運動につなげ、流域の生き物マップ作成など、吉野川紀の川の環境保全にもつなげていきたいと考えています。

5／22 「野鳥をしらべよう」（川上村）
国連生物多様性の日に併せて開催した。
上山義之さん（日本野鳥の会奈良支部）他を講師に集落周辺の野鳥を観察し、人と自然のつながりを考えた。

8／7 「夏の虫をしらべよう」（川上村）
伊藤ふくお氏（昆虫生態写真家・源流人会）、朝倉和紀氏（環境省）を講師に、意外と知らない身近な昆虫などを学んだ。

8／8 「水生昆虫をしらべよう」（川上村）
あきつの小野スポーツ公園で開催した遊水フェスタの中で開催した。谷 幸三氏（環境学博士）を招き、水の中の生き物と、水環境をテーマに環境学習を行った。

11／27 「吉野川の岩石をしらべよう」（川上村）
奥田 尚氏（奈良県立橿原考古学研究所共同研究員）を講師に招き、村内各所に残る鍾乳洞や鉱山跡などの見学を行い、吉野川源流部の岩石と地質の特徴を学んだ。

【交流プログラム】特別プログラム

時には「ほんものの自然」とどっぷりと向き合う機会を、時には村内の他の施設で、さまざま属性の、より多くの人と交流し、水源地域の環境保全の啓発をはかっています。

7／19　第９回森と水のワークショップ」
川上村の源流でどっぷりと源流にふれてもらい、源流の楽しさ、大切さを学んだ。
奈良県山の日・川の日に併せて開催した。

3/6　吉野川紀の川流域キーマン源流体験会
吉野川・紀の川流域協議会との連携により流域から一般公募で集まった参加者と、「吉野川源流－水源地の森」を巡り、水源地の森の重要性を学んだ。

5／16　吉野川紀の川源流まつり
昨年度までは財団単独事業であったが、本年度は川上村と共催事業として、流域の市町村からのブース出展・出店を行い、さらなる交流を図った。

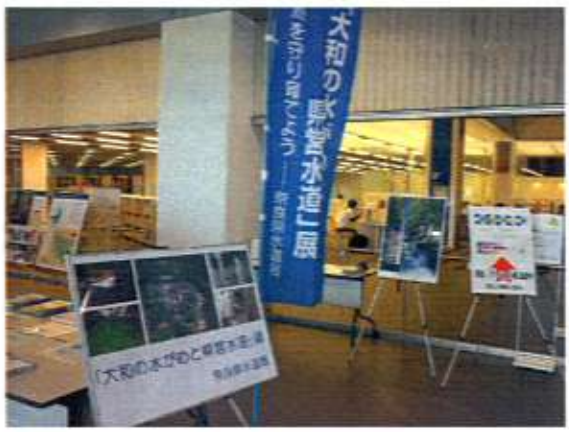
8／1　みんなでつくろう！勾玉
和歌山県立紀伊風土記の丘の協力を得て、流域の歴史を学ぶ催しを行った。
和歌山市内で発見された埴輪や勾玉に直に触れて古代人の息吹を感じ、勾玉づくりを体験した。

【交流プログラム】PR キャラバン

吉野川紀の川の流域を中心とし、各地の環境や水に関するイベントなどの機会に、森と水の源流館をとび出し、水の大切さや源流の森についての啓発活動を行っています。

奈良県暮らしと環境フェスティバル（4／3～4）
奈良市　奈良県文化会館にて開催。
NPO 法人奈良 21 世紀フォーラムへの協力として出展。川上村と源流館のPR展示とパンフレットの配布、工作・源流の利き水体験を実施。

平城遷都１３００年祭（5／10～30）
奈良市　平城宮跡にて開催
南都銀行CSR 活動「森のさんかん日」と連携し、学べる屋台の展示、出張源流教室を実施。



奈良県営水道展（6／1～6）
奈良市　奈良県立図書情報館にて開催。奈良県水道局への協力として、源流の自然を紹介する展示物やパネルの貸し出し、パンフレット・チラシの配布などを行ってもらう。

わかやま環境フォーラム２０１０（11／27）
和歌山市　片男波公園健康館アリーナにて開催
「和歌山市民の森づくり」について PR を実施。

その他の交流【シンクタンク・水源地の森管理・森と水の源流館管理】

8／25　シンポジウム「水源地の村からの提言　朱雀（南）に学ぶ　自然との共生」
奈良県立橿原考古学研究所所長 菅谷文則氏の基調講演をはじめ、森林環境教育を実施した河本大地氏（神戸夙川学院大学講師）から体験報告、及び受け入れた柏木地区のみなさんとリレートークを行う。
（平成 22 年度近畿建設協会助成事業）

9／12　吉野川紀の川ふれあいデー
源流保全を支援する団体が参加。野菜の即売や和歌山市水道局の苗木配布など、流域の仲間が集った。

9／24 吉野川源流クリーンウォーク
ボランティア有志により、吉野川源流部、三之公周辺の清掃活動を行った。

源流のクリスマスツリーと「門杉」の PR
水源地の森林環境保全を訴えるため、「木曽五木」・「高野六木」にならって、「川上七木」と称して村内の針葉樹 7 種を使ったクリスマスツリーと門松ならぬ「門杉」を製作している。22 年度はこれまでの針葉樹ではなく広葉樹（ﾌｸﾊﾞﾈｶﾞｼ・ｻｶｷ・ﾋｻｶｷ・ﾔﾌﾞﾂﾊﾞｷ・ｱｾﾋﾞ・ｿﾖｺﾞ・ﾋｲﾗｷﾞ）を使用したもの「様々な木々があることやその名前を知り、親しむことから自然を大切に思い守っていくきっかけとなれば」との思いがこめられている。

「源流学の森づくり」

森と水の源流館の会員組織「源流人会」のメンバーを活動の中心においたプログラムを実施しています。

22年度の「源流学の森づくり」ではこれまでの「源流人会限定」を外し、より多様な主体が吉野川源流部での環境保全活動に関われるようにした。源流人会の会員には指導者養成講座を実施し、必要なスキルを学ぶことで、本事業でのリーダー的な役割を果たせるように人材育成事業を行った。

森づくりの中では、土砂の流出を止める「芽吹きの砦」（木柵）設置を主として行い、合わせて、茶がゆづくり、炭焼き、道具の手入れなど、山村だからこそ残された文化を学ぶことにも比重を置いた。

11/13の「源流学の森づくり」は、上下流連携いきいき流域プロジェクト事業（吉野、北山・十津川流域林業活性化センター）として実施。
講師に植物生態学が専門の松井淳博士（奈良教育大学教授）、林業家の杉本充氏を招き、学術・文化両面から川上村の森について見学し、見識を広め、これからの森との関わりについて考えた。

【調査研究】「いろりばた教室」「下層植生調査」

「いろりばた教室」は川上村をはじめ、吉野川・紀の川流域、紀伊半島全体の民俗をテーマにした催しで、「源流学」の一翼を担っています。22年度は2回開催しました。

また源流人会会員が主体となり「水源地の森」の植生調査を実施しました。

7／4　第19回いろりばた教室「東熊野街道ウォーク」　川上村伯母谷～柏木地区間で実施

吉野と熊野を結び、後南朝や天誅組の人々が往来した東熊野街道沿いには、茶屋跡や丁石など街道の歴史を示すものが数多く残されている。参加者と共に東熊野街道のかつての賑わいを偲んだ。

9／26　第20回いろりばた教室「柿の葉寿司教室」
川上村井光「井氷鹿の里」にて実施

川上村の郷土料理「柿の葉寿司」を地元の方の指導を受けながら作ってみる。

下層植生調査（通年）

源流人会会員の専門家を中心に、源流人会会員参加型の市民調査のモデルとして行っている水源地の森下層植生調査を引き続き行った。
大まかなまとめを終え、成果を源流人会会員に還元できるよう資料の整理も行った。

その他 特筆すべき事業

和歌山市民の森づくり

紀の川河口部の和歌山市は、平成15年度に締結した「水源地保護に関する協定」にもとづき、平成 16 年度から和歌山市民の森(現在 2ha)を設定し、管理及び市民の体験会を開催している。22 年度も 2 回(10 月 17 日・31 日)の森づくり体験会を開催。

10/9～10

環境省平成 22 年度吉野熊野国立公園「五感で遊ぼう！」子ども自然体験プロジェクト業務

村内はじめ、大台ヶ原(吉野・熊野国立公園)など豊かな自然地域において、五感を使った自然観察をはじめ、簡単な自然環境調査等の様々な自然活動を体感させることによって、自然活動の楽しさを実感し、自然環境保全意識の取得、生物多様性を希求する豊かな人間形成を図ることを目的とした1泊2日のプログラムを行った。

企業のＣＳＲ活動との連携

南都銀行のCSR活動の協力事業として、平城遷都1300年祭会場で展開した「Yoshino Heartプロジェクト」で吉野産材のPRに連携し、「学べる屋台」などの展示や、「出張源流教室」を実施。また秋には同銀行が受け入れる奈良女子大学3・4回生のインターン研修において、4日間にわたりセミナーに協力。うち1日は、川上村でのミニエコツアーを行った。

ＪＩＣＡ（国際協力機構）海外からの研修受入

毎年恒例となったJICAのアジア各国からの青年研修の受入事業。社団法人まちづくり国際交流センターを通じて、川上村での体験研修を行っている。22 年度はタイ国からスタッフを含め 17 名で雪の川上村を訪問。PR施設のほか、昔ながらの集落の様子も見学した。

川上村環境基本計画の推進事業との連携

川上村が策定する環境基本計画において位置づけられた、村民の主体的な学習や発信の機会となる活動を促進・支援。環境貢献先進企業を招いた学習会や子育て世代の主婦の環境活動の輪を広げるための勉強会や講座、また吉野川紀の川河口のまちを訪ね、環境活動のキーマンと出会うツアーを実施。

活動記録

平成 22 年度　事業報告

交流プログラム

定例プログラム

イベントカレンダー等による告知で、一般参加者を募り実施している。

行事名	年月日	内　容	参加人数
水源地の森ツアー 普段は入山制限を行う「水源地の森」を案内	4 月 25 日	水源地の森ハイキング ・生物多様性をテーマに観察	10 名
	7 月 3 日	不動窟見学・匠の祭での工作体験など ※荒天のため代替ツアーを実施	5 名
	11 月 20 日	水源地の森ハイキング ・生物多様性をテーマに観察	16 名
もりみず探険隊 村内の自然や歴史的資源、村の人々とふれあうプログラム	6 月 6 日	「後南朝ゆかりの金剛寺を歩く」 ●東川～神之谷 ・語り部とともに後南朝史跡を巡る	5 名
	6 月 19 日	「源流のほたるの夕べ」 ●東川　中井渓谷自然塾とその周辺地区 ・伝統行事“千本づき”の体験 ・アマゴつかみ取りとバーベキュー ・地元の郷土食をいただく（夕飯） ・ほたる観察	14 名
	10 月 10 日	「後南朝と木地屋の里を歩く」 ●高原 ・後南朝と木地屋の史跡を巡る ・郷土料理を味わう	12 名
	1 月 30 日	「御船の滝　氷瀑ツアー」 ●井光、もりもり館 ・御船の滝までのハイキングと自然観察 ・もりもり館にて郷土食をいただく	38 名
吉野川紀の川しらべ隊 吉野川流域の生き物などを調べることから流域交流を図り、自然環境保全への取り組みに向けた啓発を図る。	5 月 22 日	「野鳥をしらべよう」 ●北和田・白川渡・上多古 ・集落・川沿いの野鳥などを観察	23 名
	8 月 7 日	「夏の虫をしらべよう」 ●西河　蜻蛉の滝周辺 ・身近な昆虫を観察	31 名
	8 月 8 日	「水生昆虫をしらべよう」 ●西河　蜻蛉の滝周辺 ・吉野川上流部の水質を水生生物をしらべて判定	33 名
	11 月 27 日	「吉野川の岩石をしらべよう」 ●東川・西河・白屋 ・鉱山跡や川原の岩石・地形を観察。紀伊半島の成り立ちについて学ぶ	8 名
	3 月 12 日	「冬の虫をしらべよう」 ●西河　蜻蛉の滝周辺 ・越冬する昆虫を中心に観察	10 名

特別プログラム・記念事業

行事名	年月日	内　容	参加人数
吉野川紀の川源流まつり	5月16日	・川辺の運動会 ・流域市町村の出展　など	約200名
第9回 森と水のワークショップ	7月19日	「カッパになって源流探検だ！」 ●三之公「水源地の森」 ・渓谷さかのぼり体験など	15名 ボランティア6名
「夏休み小学生の水道施設・水源地体験ツアー」	8月23日	奈良県水道局主催 蜻蛉の滝周辺での工作体験と館見学	90名

学校向プログラム

川上宣言にもある「これから育つ子どもたちが、自然の生命の躍動にすなおに感動できるような場をつくります」を実践する取組みである。

行事名	年月日	内　容	参加数（のべ）
小学校			
利用小学校	通年	遠足や校外学習の一環として	50校
（宿泊型体験利用） 京田辺シュタイナー学校	11月3日	水源地の森の生態系と鉱物を学習	23名
下敷き型学習教材配布	4月～5月	奈良県内及び和歌山県流域の小学校4年生に無料配布	19,748部
出張源流教室	通年	森林環境・水環境などをテーマに出張教室を実施	11校
中学校			
来館中学校	通年	遠足や校外学習の一環として	4校
出張源流教室	通年	森林環境・水環境などをテーマに出張教室を実施	1校
（宿泊型体験利用） きのくに子どもの村学園中学校	7月7日	吉野川紀の川学習の一環として、川上村を巡る学習を行う。	14名
高校			
来館高校	通年	校外学習の一環として	4校
（宿泊型体験利用） 神戸松蔭高等学校 チャレンジプログラム	12月19日 ～20日	桜井市の泉谷木材商店がコーディネートした宿泊型の森林体験プログラムに協力高校3年生が参加	15名
大学			
来館大学	通年	校外学習の一環として	19校
（宿泊型体験利用） 大阪工業大学 環境工学科	4月17日 ～18日	役場地域振興課が窓口となり受け入れ新入生の体験型オリエンテーションを開催	84名
（宿泊型体験利用） 大阪工業大学 空間デザイン学科	5月15日 ～16日	役場地域振興課が窓口となり受け入れ新入生の体験型オリエンテーションを開催	112名
（宿泊型体験利用） 大阪国際大学	5月29日 ～30日	同校講座「自然公園と森林ガイド」に基づき宿泊体験型実習を実施	10名

《宿泊型体験利用》 神戸夙川学院大学	6月12日 ～13日	同校講座「自然環境保全論」に基づき宿泊体験型実習を実施（前期開講分）	11名
《宿泊型体験利用》 大阪経済大学	8月6日	藤本研究室のゼミの実習の一環として、宿泊型体験実習を実施。	18名
《宿泊型体験利用》 神戸夙川学院大学	12月4日 ～5日	同校講座「自然環境保全論」に基づき宿泊体験型実習を実施（後期開講分）	19名

PRキャラバン

流域市町村やＮＰＯ、市民グループなどが主催するイベントなどに出向き、「水源地の村づくり」の取組みのＰＲを行なっている。

行事名	年月日	内　容	参加人数 （主催者発表）
第7回　奈良県暮らしと環境ﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙ （奈良市　奈良県文化会館）	4月3日～4日	NPO法人奈良21世紀ﾌｫｰﾗﾑへの協力で、ﾊﾟﾈﾙ展示・工作体験など実施	10,000人
天川村名水まつり （天川村　天川村ビジターセンター）	4月29日	出張工作体験を実施	—
アースディ平城京2010 （奈良市　平城宮跡資料館）	5月1日	平城遷都1300年祭と同時開催。ﾊﾟﾈﾙ出展・工作体験を実施	—
平城遷都1300年祭 （奈良市　1300年祭交流ホール）	5月10日 ～30日	南都銀行CSRとの連携で出張教室実施	—
大和の水がめと県営水道展 （奈良市　県立図書情報館）	6月1日～6日	ﾊﾟﾈﾙ・木の実等貸し出し。ﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄ・ﾁﾗｼの配布	200人
みんなあつまれ！「山の日・川の日」 （奈良市　1300年祭交流ホール）	7月19日 ～20日	ﾊﾟﾈﾙ展示	—
大滝ダム事業促進協議会PR （奈良市　奈良県庁）	8月9日～13日	ﾊﾟﾈﾙ展示	—
吉野町ヒストリートーク （吉野町　吉野歴史資料館）	8月20日	出前授業	12人
子ども考古学講座 （橿原市　橿考研付属博物館）	8月21日	川上村産の吉野杉を使用した古代の琴作り体験を実施	30人
奈良県環境ネットワーク （奈良市　奈良県ファミリー）	8月28日 ～29日	出張源流教室・ﾊﾟﾈﾙ出展・工作体験	—
橿原市昆虫館 （橿原市　橿原市昆虫館）	9月10日	ﾊﾟﾈﾙ展示	—
奈良県環境ﾌｪｱ2010 （大和高田市　奈良県地場産業会館）	9月20日	ﾊﾟﾈﾙ出展、DVD上映	800人
風土記まつり （和歌山市　紀伊風土記の丘）	10月11日	ﾊﾟﾈﾙ展示・観察会・工作体験	—
和歌山ふれあい人権フェスタ2010 （和歌山市　ビックホエール）	11月13日 ～14日	ﾊﾟﾈﾙ展示・工作体験	—
わかやま環境フォーラム2010 （和歌山市　片男波公園）	11月27日	「和歌山市民の森づくり」ＰＲ	1,200人
ふれあい生き物展 （大阪市　キッズプラザ大阪）	11月28日	出張源流教室	100人
干支の考古学展 （橿原市　橿考研付属博物館）	1月15日	卯年の企画展示期間中に、小枝を使った干支の工作を実施	—
近畿子どもの水辺交流会 （奈良市　奈良県文化会館）	1月23日	ﾊﾟﾈﾙ展示・工作体験（石の標本づくり）	—

川上村・杉の湯PR （大阪市　近鉄阿倍野橋駅）	2月6日	杉の湯リニューアルPRとして源流館のパネル・生き物展示	—
橿原市サイエンスフェスティバル （橿原市　橿原市万葉ホール）	2月11日	工作体験	1,100人
きんき環境団体大集合 （大阪市　きんき環境館）	2月13日	パネル展示	—
橿原市昆虫館　生命の不思議展 （橿原市　橿原市昆虫館）	3月25日 ～6月29日	パネル展示	—
第8回　奈良県暮らしと環境フェスティバル （奈良市　奈良県文化会館）	3月26日 ～27日	NPO法人奈良21世紀フォーラムへの協力で、パネル展示・PRビデオ上映・工作体験を実施	—

プログラム（水源地の森ツアー等）参加団体

大阪工業大学／大阪教育大学／大阪経済大学／大阪国際大学／神戸風川学院大学／神戸松陰高等高校／きのくに子どもの村学園中学校／京田辺シュタイナー学校／生駒市立生駒第二小学校／宇陀市立榛原東小学校／橿原市立香久山小学校／橿原市立鴨公小学校／天理市立井戸堂小学校／奈良市立明治小学校／和歌山市立雑賀小学校／NPO法人シニア自然大学／水土里ネット／里なびシンポジウム／吉野川紀の川流域協議会／大和薬品／奈良県商工会議所ほか

源流人会・シンクタンク

源流人会

森と水の源流館の友の会的組織。限定イベントや調査への参加、機関紙への投稿・研究発表などへの参加、イベントへの出展など幅広い分野での森と水の源流館の応援団である。

（年会費：個人2,000円、家族3,000円、団体10,000円、学生1,000円）

会員	3月末現在	120件　22年度中の有料入会・更新（1年更新）件数	
機関紙「ぼたり」発行	1月	第19号（冬号） 「山が病院だった」「源流の主役たち」「吉野林業の歴史」	
	3月	第20号（春号） 「山が病院だった」「源流の主役たち」「もりみず探検隊」	
源流人会限定企画	4月10日 ～11日	・源流学の森指導者養成講座	4名
	1月17日	・源流人会春のつどい	9名
源流学の森づくり いったん伐採され現在はうっそうと荒れた天然林において除伐等の作業をとおして源流域の暮らしの知恵や山仕事の技を学ぶ	5月8日	・芽吹きの砦（木橋）づくり	2名
	7月10日	・芽吹きの砦（木橋）づくり	2名
	9月25日	・道直し	3名
	11月13日	・川上村の森林の学習	14名

シンクタンク

行事名	年月日	内　容	参加人数
(社)近畿建設協会支援シンポジウム "水源地の村"からの提言 「未省(南)に学ぶ自然との共生」 （橿原市商工経済会館）	8月27日	県立橿原考古学研究所所長　菅谷文則氏の基調講演、また川上村で森林環境教育を実施した学校の体験報告と受け入れ側の村民によるリレートーク	230名

調査研究

自然・地理調査

行事名	年月日	内　容	参加人数（のべ）
水源地の森の下層植生調査（龍谷大学理工学部横田研究室に依頼）	6月20日	プロット内の植物の記録	3名
	6月21日	プロット内の植物の記録	3名
	10月2日	プロット内の植物の記録	4名
	10月3日	プロット内の植物の記録	1名
水源地の森両生は虫類調査（源流人会会員の研究者がボランティアで実施）	2月24日	ナガレタゴガエル産卵調査	2名
水源地の森菌類調査（源流人会会員、研究者＋奈良教育大菊地研究室、国立科学博物館植物研究部、オレゴン州立大と共同）	6月11日	トガサワラ菌根調査	3名
	6月22日	トガサワラ菌根調査	3名
	7月6日	トガサワラ菌根調査	4名
	7月7日	トガサワラ菌根調査	3名
	7月20日	トガサワラ菌根調査	1名
	7月21日	トガサワラ菌根調査	2名
	7月30日	トガサワラ菌根調査	2名
	9月21日	トガサワラ菌根調査	3名
	10月19日	トガサワラ菌根調査	4名
	10月29日	トガサワラ菌根調査	2名
水源地の森森林療法予備調査（大阪国際大学と共同）	9月14日	唾液アミラーゼストレステスト	5名
水源地の森底生動物調査	8月9日～11日	底生動物サンプリング	7名

民俗講演会「いろりばた教室」

川上村と吉野川紀の川流域、紀伊半島をフィールドにテーマを設定し、村民や専門講師による講演会や体験会を開催

行事名	年月日	内　容	参加人数
第19回いろりばた教室「東熊野街道ウォーク」	7月4日	吉野と熊野を結ぶ東熊野街道を歩き、街道沿いに残る道標や旅館を見学しかつての賑わいを偲んだ。	5名
第20回いろりばた教室「柿の葉寿司教室」	9月26日	井光地区、井氷鹿の里で地域の方に郷土料理を学び、ハイキングで景観を楽しんだ。	1名

森と水の源流館管理

行事名	年月日	内　容	参加人数
利用者数	－	累計利用者数が13万人を突破	年間利用者数 13203名
定期メンテナンス	－	映像機器・展示・エレベーター・防火設備などを点検	－
定期清掃	－	日々清掃のほか外構点検。 床ワックス・空調機などは専門業者により定期清掃	－
修繕	－	空調機器・映像機器・展示の修理対応	－
館内照明のLED化	3月	村の事業として館内照明約３００基をＬＥＤに交換（「省エネ・グリーン化推進補助金」を使用）	－
企画展 「川上村の岩石」	7月17日 ～8月31日	村内発見の県最古の化石をはじめ、流域で見られる鉱石・石材を展示	－
企画展 「冬虫夏草アート展」	9月12日 ～12月10日	冬虫夏草をアートで展示して、生き物への興味を喚起。中谷佳詩子氏協力	－
夏休み 宿題応援プログラム	7月20日 ～8月30日	間伐丸太のこぎりひき体験や、宿題シート。水生生物のスケッチなど実施	－
企画展 「川上村の昆虫」	3月1日 ～31日	川上村の昆虫を、実物標本及びパネルで展示。好評に付き常設展示化	－
クリスマスツリー・門松	12月12日 ～1月15日	七種類の広葉樹をクリスマスツリーと門松に仕立てて PR	－

※「源流の森シアター」の映像機器（ＤＶＤプレイヤー）を交換

水源地の森管理

行事名	年月日	内　容	参加人数
点検・修繕	通年	管理棟の水道・バイオトイレ修理と挽粉の入替。休憩小屋補修・清掃など。水源地の森内の林道（木橋）補修、危険木の処理作業などを実施	－
水源地の森守募金	通年	各イベントやキャラバンでの呼びかけや募金箱の配布により年間募金額は296,251円(21年9月～22年8月)	－
第９回　森守募金キャンペーン ふれあいデー	9月12日	流域の団体が参加し、バザー・コンサートなどを開催し、交流を深める。	約250人
下敷き型教材製作	3月	奈良県内及び和歌山県流域の小学校４年生へ教材を無償配布。製作費の一部に森守募金をあてて印刷	19,748部

交流施設管理

行事名	年月日	内　容	参加人数
利用者	通年	村実施のインターン学生・館ボランティアスタッフのほか、水源地の森などの調査者等が宿泊	50人
定期清掃及び修繕	通年	使用前後の点検・清掃などを実施。浴室水道の修理を実施	－

特別会計〔ミュージアムショップ〕

「下流にはいつもきれいな水を流します」というメッセージを行動として表現できる"環境にやさしい"商品や関連書籍、オリジナル商品を販売している。

販売物	内　容	売上げ
書籍	「大切にしたい奈良県の野生動植物」(1,000) 「どんぐりの図鑑」(2,940) 「ひっつきむしの図鑑」(2,940) 「こんにちはカエルくん」(800) 「生き物星図鑑」(1,785) 「大峰・台高　大台ケ原」(1,575) 「大峰山・大台ヶ原山」(1,680) 「わたしは紀ノ川」(600) ほか全51アイテム	417,984円
オリジナル商品	写真集「清流の語りべたち」(1,500) 絵本「ふたつの龍のはなし」(500) 副読本「水の旅のはなし」(300) 図鑑「川上村の巨樹」(525) 「もっくん キーホルダー」(200・500) 「もっくん セット」(500) 「ポストカード」(50) 「メモしとき」(1200) 「源流館シール」(50) ほか全14アイテム	
川上村関連の商品	「川上村昔ばなし」(300) 「吉野川紀の川流域散歩」(800) 「後南朝絵ハガキ」(250) 「木ほるだー」(315) 「漆器（盆）」(3,500) ほか全7アイテム	
水をよごさない 環境にやさしい商品	EM関係 EM500mL (1,100) EM1L (21,00) 糖蜜500mL (350) 糖蜜1L (600) 石けん・洗剤 EM粉石けん (880) EM化粧石けん (170) 化粧石けん浴用 (136) 台所用固形石けん (136) EM台所液体石けん (336) ほか全43アイテム	
自然観察用品 環境関係の商品 木に親しむ商品	「観察用ミルピン」(大300・小480) 「魚魚あわせ」(1260) 「移ひだ（マグネット）」(120・130) 「カエル徒然一筆箋」(462) 「NEWケニヒョシ（ストラップ）」(1,050) 「鳴いているカジカガエル（模型）」(5,460) 「スパイクシューズ」(3,300) ほか全36アイテム	

特別会計〔受託事業〕

行事名	年月日	内　容	参加人数
和歌山市民の森づくり 管理業務受託 （和歌山市）	8月～12月	下草刈・補修ほか作業	－
和歌山市民の森づくり 森づくり体験事業業務受託 （和歌山市）	10月17日 10月31日	崩土整備、除伐作業指導、市民の森散策の体験行事を2回開催	15人（＋職員5名） 23人（＋職員4名）
環境省平成22年度吉野熊野国立公園「五感で遊ぼう！」子ども自然体験プロジェクト業務	10月9日 ～10日	丸太切り体験や植生調査などを通じて自然活動の楽しさを知る。	14名（＋職員3名）

その他〔川上村環境基本計画推進業務〕

川上村環境基本計画において位置づけられた、村民の主体的な学習や発信の機会となる活動を促進・支援することを目的とした実施。

行事名	年月日	内　容	参加人数
"環境貢献先進企業"を 川上村に招いて行う学習会	11月19日	シャボン玉石けん株式会社講演会	40人
子育て世代の主婦を中心とした環境学習会	12月16日 2月8日	川上村の地域情報を再発見と共有について話し合い、導入編として茶がゆ講座を開催	4人 8人
紀の川中流の農業を知る。 和歌の浦の有機食材レストランほかへの訪問	3月11日	紀の川の水の恩恵を受ける地域を訪ね、水源地の役割を再認識、市民環境活動のネットワークを広げる。	26人

パブリシティ（新聞記事）

新聞　奈良新聞　H22・4・20　（第3種郵便物認可）

36年ぶりカワノリ確認

絶滅危惧の希少種

県内唯一分布地　川上・入之波で

「豊かな自然、回復の証し」

県内では川上村にだけ分布するカワノリの生育が、36年ぶりに確認された。岡山県津山市の会社員、和田孝史さん（22）が昨夏、生態学を学んでいた龍谷大の卒業研究調査で発見。今月18日に奈良教育大で行われた奈良植物研究会大会で発表した。

学術調査で発見された、透明な緑色をしたカワノリ（森と水の源流館提供）

カワノリは、アルカリ性水質で水温の低い渓流にのみ生育すると言われる希少種のノリ。絶滅危惧（きぐ）種で、環境省のレッドリストにも掲載されている。川上村入之波（しおのは）では、かつて周辺一面に繁茂し、江戸時代、徳川家に献上した文献も残されているという。

しかし、昭和34年の伊勢湾台風で激減。奈良女子大が48年の学術調査で、上流の数カ所で発見したのが最後だった。入之波上流のゴウシギ谷のものは29年に県天然記念物の指定を受けたが、49年の大迫ダムの建設でダム湖に沈み、生育は絶望視されている。

昨年7月、同村の「森と水の源流館」職員の木村全邦さん（37）らが同行して、入之波上流約1キロを4時間ほどかけて沢登りしながら調査。数カ所で岩に着生したカワノリを確認した。

和田さんは「珍しいものを調査したくて始めたが、発見できてうれしい。カワノリの研究を通して、村の豊かな自然を多くの人に伝えたい」。木村さんは「いい機会をもらい、村にとっても貴重な発見。良好な自然環境を県の宝として残したい」と話す。大阪産業大非常勤講師の環境科学博士、谷幸三さんは「昔、いかだ場で見たことがあった。環境回復の証しと言えるのではないか」と話している。

同館では、きょう20日から5月10日まで、カワノリの標本を特別展示する。水曜休館（祝日の場合はその翌日）。入館料大人400円、小中学生200円。問い合わせは同館、電話07-46（552）0888。

奈良新聞　H22・4・20

（第三種郵便物認可）

「カワノリ」30年ぶりに確認

絶滅危惧種 きょうから標本展示

川上村

絶滅のおそれのある野生生物として環境省レッドリストの「絶滅危惧Ⅱ類」（絶滅の危険が増大している種）に指定されている「カワノリ」が、県内で唯一の生息地とされる川上村で、「森と水の源流館」（同村宮の平）と横田岳人・龍谷大准教授らの調査により約30年ぶりに確認され、源流館で20日から標本が特別展示される。源流館は「村の貴重な自然を多くの人に知ってほしい」と来場を呼びかけている。5月10日まで。

源流館によると、カワノリはカワノリ科に属する緑藻類で、関東以西の本州、四国、九州の太平洋側に注ぐ河川の上流に分布。古くから食用とされ、明治時代以降の乱獲の影響で、近畿地方で現在、生育が確認されているのは、川上村のほか、滋賀県米原市醒ケ井、三重県の藤原岳だけ。博物学・民俗学の大家、南方熊楠の全集には天理市内で産したと記されているが、現状は定かではないという。

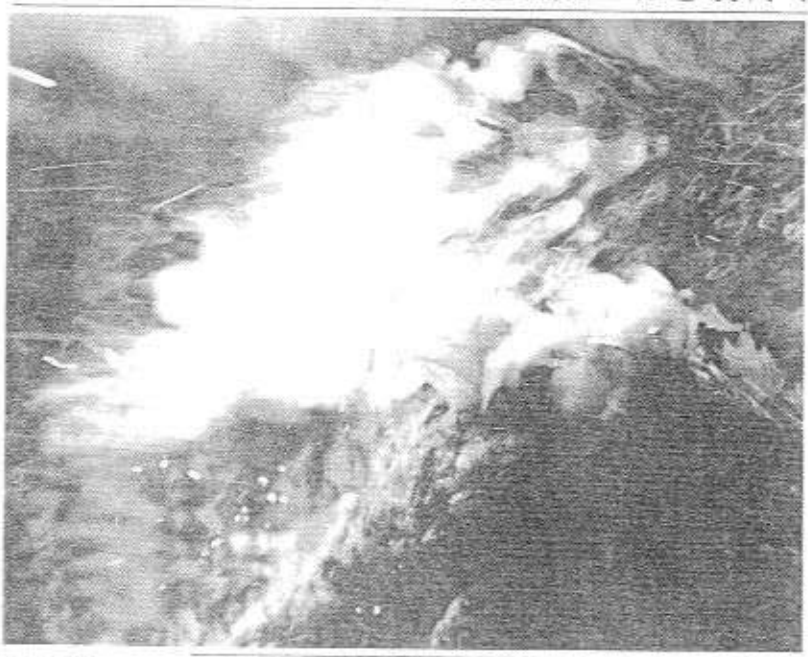
川上村でも、明治以降に珍味として乱獲され激減したとされる。昭和29年に、「吉野郡川上村入之波コウシギ谷（吉野川入之波より上流地域）」の「かわのり」が県の天然記念物に指定された。

しかし、コウシギ谷は48年に完成した大迫ダムの湖底に沈み、生育が絶望的に。57年以降は調査自体が行われなくなり、生育実態は長期間、把握されていなかった。

そこで、源流館の木村全邦企画調査班長と横田准教授らが昨年3月から調査を開始。村内7河川を調べた結果、7月に、白倉又谷の上流にわずかに生育しているカワノリを発見した。その後、生育地の水素イオン指数や電気伝導度を調べ、似た環境の河川を調べたが、ほかでは発見には至っていないという。

木村企画調査班長は「カワノリを保存するのが今後の課題。まずは川上村の貴重な自然を知ってほしい」と話している。

開館は午前9時～午後5時。水曜（祝日の場合はその翌日）休館。入館料は、高校生以上400円、小・中学生200円。問い合わせは、森と水の源流館（☎0746・52・0888）へ。



約30年ぶりに川上村で確認されたカワノリ（和田孝史さん撮影）

川上村の岩石紹介

来月まで「森と水の源流館」

県最古のサンゴ化石も展示

川上村迫の「森と水の源流館」で、村内で見られる岩石や地形を紹介した企画展「川上村の岩石」が開かれている。8月31日まで。

チャートや緑色岩など海底火山の溶岩、村入之波で発見された県最古のサンゴ化石（3億3千万年前）を展示。同館は「紀伊半島の成り立ちを探ることができるのでは」と話している。

白土として吉野町国栖の紙すきに使う石灰岩の鉱山跡、神社や寺に使われた火砕岩など村の歴史、文化も紹介している。

午前9時から午後5時まで。水曜休館。入館料は一般400円、小中学生200円。31日と8月21日にはイベント「石の標本づくり」がある。

問い合わせは、森と水の源流館、電話0746（52）0888。

展示された県内最古のサンゴ化石＝川上村迫の「森と水の源流館」

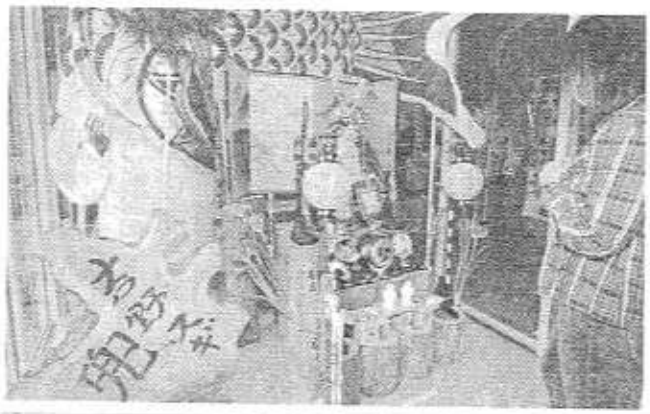
奈良新聞　H22・7・21

奈良新聞　H22・5・8

吉野杉に兜どっしり

川上「源流館」来月まで展示

間伐材使い館長手作り



吉野杉を利用して展示されている五月人形＝川上村迫の「森と水の源流館」

川上村迫の「森と水の源流館」で、吉野杉をテーマにした五月人形「吉野スギ兜（かぶと）」の展示が行われている。6月6日まで。

辻谷達雄館長（76）が、吉野杉の間伐材や廃材を利用して台座を製作。看板にも吉野杉の切り株が使われている。上部には大きなこいのぼりが泳ぐ。

これらの展示には、同館の「吉野杉だけでなく国産材が利用され大するとともに、子どもたちも真っすぐに成長してほしい」との願いがこめられているという。問い合わせは同館、電話0746（52）0888。

吉野の森を再現

平城遷都1300年祭　平城宮跡会場で

★ヒノキの香りを演出

南都銀行

5月30日まで出展

南都銀行は、吉野産材を使った木製のブランドの普及を通じて、吉野の森と産業を元気にする「Yoshino Heart プロジェクト」、林野庁が推進する「木づかい運動」を支援するため、多様な活動を行っている。

「平城の森」はその一つとして、平城遷都1300年祭に協力している同行は、来場者に吉野材の魅力をアピールし、吉野材製品を展示するなどして、吉野材の魅力をPRしている。

吉野桜井木材産業クラブのメンバーも協力

★木工品の展示

木工品コーナーでは吉野杉、吉野ヒノキなどを使った食器などの木製品を数多くならべている。来場者は、自由に上ったり、木の香りを楽しんでいるようだった。

ほかにも、間伐材、おもちゃ、ルアーなどがあり、木の魅力を感じるとともに、森を育てる活動となっている。現代生活を豊かにする商品の開発も進められている。

★出張講座教室

小さな子供と木との接点を作り、森を育てる、守る、育てるなどの「学ぶ吉野杉」を題材とした写真、ポスターなどを使ったコーナーを設置。

また、ちょっとした遊びながら学べる工夫の数々が本を用意されている。教室には、子ども図書のスタッフが配置され、一日に数回開催される「紙芝居」。

れで体感

森を学ぶ屋台も

吉野産材の魅力をＰＲ

★パネル展示

パネル展示コーナーでは、10枚のパネルで、吉野林業、木材の特性、Yoshino Heart プロジェクトなどを紹介する写真、

「木造住宅の設計」では、所沢・長野木造住宅、木造建築の事例紹介とともに、木造住宅を対象とした木造住宅が、来場者をしっかりとPRしていた。

平成22年（2010年）8月14日　土曜日　奈良新聞

間伐材がクワガタに

川上の源流館　木の粉でプラモデル

杉やヒノキを製材するときに出る木の粉「ヒキコ」を利用したエコプラモデルを和歌山市の会社が開発。同村迫の森と水の源流館で、同館チラシを持参してクイズに答えた正解者の中から、先着50人にプレゼントしている。

エコ訴えるツールに

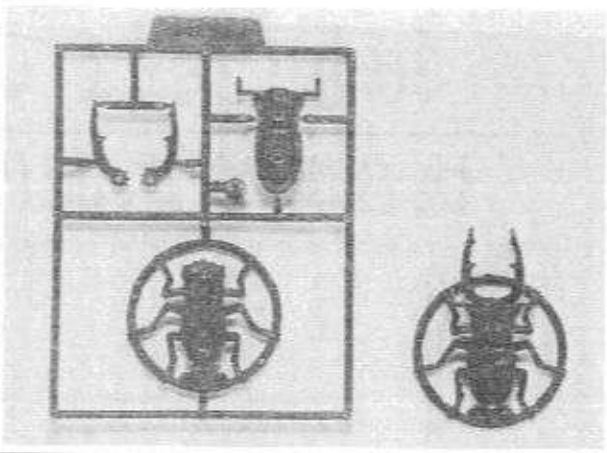
開発したのは同館の会員組織「源流人会」に法人会員として参画している、マネキン製造会社「ヤマトクリエーション和歌山」。

同社は昨年秋から、廃棄処分されるだけだった紀州産梅干しの種を使ったプラモデルを開発し成功した。

それを知った同館が川上村産の間伐材でできないか同社に打診していた。プラモデルの形はクワガタで、「ヒキコ」を約70%使用している。

同館は「森の中のものは無駄なく使えることを、子どもたちに知ってもらうツールになれば」と期待。今後、記念品などで使用したい団体や企業に販売していく予定という。

問い合わせは、森と水の源流館、電話07-46（52）0888。



木くずから開発されたプラモデル＝川上村迫の森と水の源流館

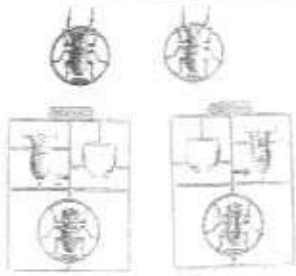
朝日新聞　10・8・12

廃棄材など使い プラモデル開発

川上の「源流館」贈る

杉やヒノキを製材する際に出る木材の粉「ヒキコ」を使ったクワガタのプラモデルを、川上村の環境教育の施設「森と水の源流館」（辻谷邦雄館長）が今月末まで、クイズに答えた来館者にプレゼントしている。「地産地消の素材を使ってエコなことをしたい」と和歌山市のマネキン製造会社と開発した。

エコプラモデルをつくったのは、和歌山市の「ヤマトクリエーション和歌山」の専務、古川義彦さん（32）。ヒキコ70%にポリプロピレン30%を混ぜたものを射出成型した。素材の色が材質がそのまま出た焦げ茶色をしている。



上段右がヒキコ製の完成形。下段はプラモデルの表と裏。上段左は梅干しの種製

古川さんは、親会社が木材や貝殻を使った世界初の「バイオマスマネキン」を開発したのを機に、「地元の素材を使って何かできないか」と、昨年秋から紀州産梅干しの種でつくったプラモデルに取り組み、梅干しの種80%のものを完成させた。同社が源流館を応援する「源流人会」の法人会員だったことから、源流館から5月、「廃棄素材ではなくヒキコを使えないか」と提案した。

源流館（07-46-52・0888）は水曜休館。入館料大人400円、小中学生100円。

朝日新聞和歌山版　H22・8・19

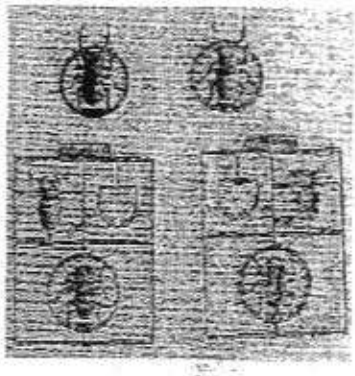
第3種郵便物認可

NEWS にっぽん

ヒキコ再生プラモ

和歌山の会社開発

杉やヒノキを製材する際に出る木材の粉「ヒキコ」を使ったクワガタのプラモデルを、奈良県川上村の環境教育の施設「森と水の源流館」（辻谷建館長）が今月末まで、クイズに答えた来館者にプレゼントしている。「地産地消の素材を使ってエコなことをしたい」と和歌山市のマネキン製造会社と開発した。



上段右がヒキコ製の完成形。下段はプラモデルの表と裏。上段左は梅干しの種製

エコプラモデルをつくったのは、和歌山市の「ヤマトクリエーション和歌山」の事務、古川愛尚さん(32)。ヒキコ70％にポリプロピレン30％を混ぜたものを射出成型した。素材の色や材質がそのまま出た風合いを色をしている。

古川さんは、親会社が木材や貝殻を使った世界初の「バイオマスマネキン」を開発したのを機に、「地元の素材を使って何かできないか」と、昨年秋から紀州産梅干しの種つくったプラモデルに取り組み、梅干しの種80％のものを完成させた。同じく源流館を応援する源流応援人会の社人会員だったことから、源流館が8月、「産業開発賞初になるとヒキコを使えないか」と提案した。

古川さんは「自然にかえる素材を使った梅クワガタとか吉野杉クワガタとか、地方色豊かなプラモデルがあっても良いと思う。子どもたちがエコを考えるきっかけになってほしい」と話す。

源流館（0746・52・0888）は水曜休館。入館券大人400円、小中学生200円。

(9)　2010年8月21日　リビング和歌山

紀の川源流、川上村からの贈り物

間伐材の木くずでエコプラモデル

森と水の源流館でもプレゼント中

紀の川の源流、奈良県川上村からプチギフト。間伐材や体験イベントなどで、源流の自然や水源地の森の大切さを伝える「森と水の源流館」（吉野郡川上村）がエコプラモデルを製作した。これは、川上村産スギ・ヒノキの粉（ヒキコ）から作られたもの。「ヤマトクリエーション」（和歌山市湊）が動き、紀の川でつながる海辺と河口のコラボで実現しました。1個約7グラムのプラモデルとCO2発生を約55％抑制できるというすぐれもの。

夏休み期間の8月31日（火）まで、同館を訪れ「リビング和歌山を見た」と言えば、このプラモデルがプレゼントされます。

相模で10人にエコプラモデルをプレゼント。ハガキに住所、氏名、年齢、電話番号を明記し〒640-8055（住所不要）和歌山リビング新聞社「クワガタエコプラモデル」係へ。9月1日（水）必着。当選発表は発送をもってかえます。

間伐材でもこんな形に（イメージ）

毎日新聞　H22・8・12

「ひきこ」でクワガタ

森と水の源流館 プラモデルを製作

50人にプレゼント

川上

地元の資源を有効利用し、林業に目を向けてもらおうと、川上村迫の森と水の源流館は、製材の時に出る「ひきこ」（おがくず）を使ったクワガタムシのプラモデルを製作し、クイズに答えた人にプレゼントしている。31日までで、先着50人。

同館の会員組織（源流人会）に加入しているヤマトクリエーション和歌山（和歌山市湊）が、廃棄されていた梅干しの種を混ぜたプラモデルを製作したと聞き、メーカーにひきこを混ぜて製作を依頼した。

曲がった大きなはさみを振り上げた姿が子供たちに人気のノコギリクワガタで、長さ約7センチ。組み立て式。ひきこを7割ほど混ぜて600個を製作した。メーカーによると、CO2の発生を55％抑制できるという。

クイズは館内に置いたイベントチラシに記載。「企業の記念品用などに使ってほしい」と、販売もしている。問い合わせは同館（0746・52・0888）。【栗栖健】

「ひきこ」が入ったプラモデルのノコギリクワガタ

建国神話「南和に鍵」

源流館シンポ　橿考研所長が講演

橿原

川上村の「水と森の源流館」は25日、橿原市久米町の市産工経済会館で、シンポジウム「水源地の村」からの提言「未省（言）に学ぶ自然との共生」を開いた。

財団法人吉野川紀の川源流域振興事業団の大谷二三川上村長は「平城遷都1300年祭の年に、南和地域からの発信になれば」とあいさつ。県立橿原考古学研究所の菅谷文則所長が「記紀の建国伝承と吉野・川上」と題して基調講演した。

菅谷所長は、建国神話の大和にまるルートについて「山の上の道を通ったのではないか。縄文時代以来、熊野と大峰山系を結ぶ道があり、それを復興したのが修験道だった」と指摘。「建国神話は大和盆地ではなく、紀伊半島南部が重要だった」と強調した。

事例報告では、神戸学院大学講師の河本大地さんが、川上村柏木での学生による環境学習の体験について紹介。地域住民との意見交換も行われた。

菅谷所長が基調講演したシンポジウム＝25日、橿原市久米町の市産工経済会館

奈良日日新聞　H22・8・27

8月25日（水）

県南部からの発信、「水源地の村」からの提言

森と水の源流館（川上村吉野）は、理事長・大谷二三村長）は、三夏の恒例行事となったシンポジウム「水源地の村」からの提言」を橿原市産工経済会館（同市久米町）で開いた＝写真。4回目となる今回は「未省（言）に学ぶ自然との共生」をメーンテーマに開催。県立橿原考古学研究所の菅谷文則さんによる基調講演「記紀の建国伝承と吉野・川上」が行われたほか、神戸学院大学の河本大地さんが「川上村での環境学習体験」、国際語「語り部」による山村の魅力」があった。

大谷理事長は「平城遷都1300年を機に、県南部から発信したい。また講演を新宮を今後の村づくりのヒントにできればと話した。

水源地の村　川上

辻谷　連雄

川上村は奈良県吉野郡東部の三重県境に位置し、桜で名高い吉野山や紀伊山地の霊場と参詣道として世界遺産に登録された大峰奥駈道が通っている大峰山系、大台ヶ原から始まる台高山脈などの急峻な山々に囲まれています。吉野川（紀の川）源流の緑と水の豊かな村であり、良質な材木「吉野杉」を産出する林業の盛んな村として栄えてきました。

しかし近年、大迫ダム（農林水産省）と大滝ダム（国土交通省）の二つのダムが造られたことにより、平成六年に策定した村の総合計画「吉野川紀の川源流物語」では、ダムとともに"水源地の村"として生きる決心をし、平成八年にその根幹をなす「川上宣言」を全国へ発信しました。

「川上宣言」

一、私たち川上は、かけがえのない水がつくられる場に暮らす者として、下流にはいつもきれいな水を流します。

一、私たち川上は、自然と一体となった産業を育んで山と水を守り、都市にはない豊かな生活を築きます。

一、私たち川上は、都市や平野部の人たちにも、川上の豊かな自然の価値に触れ合ってもらえるような仕組みづくりに励みます。

一、私たち川上は、これから育つ子供たちが、自然の生命の躍動に素直に感動できるような場を作ります。

一、私たち川上は、川上における自然とのつきあいが、地球環境に対する人類の目覚めのきっかけの、すばらしい見本になるよう努めます。

五つの宣言文からなる"水源地の村"としての役割をもとに、樹と人と水の共生をキャッチフレーズにいろいろな事業を展開してきました。その中の一つが原生林（今までも一度も人の手に加わっていない森）の購入でした。平成十一年から十四年にかけて七四〇haという莫大な面積（甲子園球場の約一八〇倍）を川上村が吉野川の水資源保全のために約十億円を投入して買い上げました。なぜこのようなことをしたかというと、当時、製紙会社によって原生林がどんどん伐採され、禿げ山になったところもありました。このまま伐採が進めば吉野川の水源が干上がる危険性を察し、森林所有者の理解もあって購入に踏み切りました。当時全国から大きな反響を呼んだ小さな村の大きな決断に、村の姿勢を評価する励ましや、各自治体からの問い合わせなどが数多くありました。

原生林のある三之公は川上村の奥地で、三重県の言川と尾根を隔てた台高山脈に至っています。今から約五五〇年前の後南朝の歴史の舞台でもあります。今まで人の手が入っておらず、ブナ、ツガ、モミ、トガサワラ、ケヤキ、ミズナラ等の巨木があり、ツキノワグマ、ニホンカモシカ、ニホンジカ、ホンドテン、ニホンザル、ホンドタヌキ等の動物が棲んでいます。まさしく、吉野川の最初の一滴の水が生まれるこの森を「吉野川源流―水源地の森」と名付けて保全し、次世代へ残していくのが、我々の責務であると心得ています。

"水源地の村"づくりの拠点として、また水源地の森の管理のために、平成十四年四月に森と水の源流館をオープンしました。森と水の源流館の役割は、館内で源流の自然を楽しみながら学び、水源地の森を守ることの大切さをわかりやすく伝えること、地球環境問題、水資源問題等を水源地の視点から考えること、そして、本当の森や水の楽しさをみなさん方と交流の輪を広げることです。源流とは何か、私たちの暮らしとどんな関係があるのか、森と水の源流館は様々な発見の入り口です。

館内中央は、実際に森の中にいるような気分が味わえる、日本最大級の巨大パノラマ映像を映す源流の森シアターです。他にも、河口から源流へ川を遡るようにそこに棲む生物たちに出会える水槽、川上村の歴史や暮らし、森や川のフィールド体験などがあり、子供から大人まで源流について楽しく学べます。

水源地の森は、現在は入山を禁止しています。それは、言うまでもなく森林環境や森林生態系への負荷を軽減するためです。年数回開催している水源地の森ツアーも定員二十名に限定し、森を案内しながら森と水の大切さを伝えています。また、最近は学校の森林環境教育場としても活用しています。森は四季を通して様々なことを教えてくれると同時に心身の癒しの場でもあります。百聞は一見にしかずという言葉のとおり、ぜひ本物の自然を体験してみてください。

（森と水の源流館　館長）

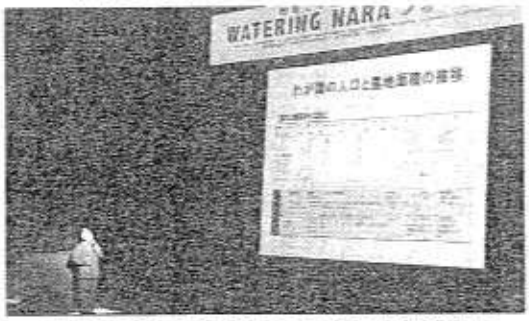
正倉院がはぐくんだ都の文化と暮らし……杉本　一樹……（1）
長屋王と遣唐使……寺崎　保広……（2）
第六十二回　正倉院展
平成二十二年十月二日～十月十日迄……内藤　実……（3）
東アジアとの友好交流……上垣　豊治……（4）
中国福州市との友好都市提携について……山本　二郎……（5）
水源地の村　川上……辻谷　連雄……（6）
明治二十年代以前の
二条城吉保古墳群……平田　真宣……（7）
奈良時代の方言持ち込の食材……斎藤　俊治……（8）

発行所
南都　奈良市紀寺町　841
奈良観光　TEL 0742（24）4394
FAX 0742（22）5715
印刷所
関西印刷株式会社
TEL 0742（26）2481

奈良新聞　H22・11・14

水環境を考える

県営水道40周年でフォーラム



水環境について講演する三野徹・鳥取環境大教授＝田原本町阪手の弥生の里ホール

県営水道給水開始40周年記念「WATERING NARAフォーラム」（県主催）がこのほど、田原本町阪手の田原本青垣生涯学習センター弥生の里ホールで、約370人が参加して開かれた。

水環境への理解を深めてもらうとともに、水環境を考えてもらうのが目的。県営水道40周年にあたり、水源地（吉野町、川上村、宇陀市）と大和平野土地改良区、倉橋溜池土地改良区、大和川市民ネットワークに県から感謝状が伝達された。

リレー講演もあり、三野徹・鳥取環境大学教授、辻谷達雄・森と水の源流館館長ら5人が「地域で育む健全な水環境」をテーマにパネル討論した。

奈良新聞　H22・12・2

企業に学ぶ環境貢献

川上　講師招き学習会

環境貢献先進企業から講師を招いて開かれた学習会＝川上村迫の村総合センター

川上村の「森と水の源流館」は、同村迫の村総合センターで、環境貢献先進企業から講師を招いた第1回学習会を開催。村民ら約40人が身近な環境について学んだ。

「シャボン玉せっけん」「品質保証部の倉田知司係長が「健康な体ときれいな水を守る」と題して講演。合成洗剤と比較しながら、無添加石けんの製造法や成分を紹介し「汚いプラい面があるが、生態系にも体にもやさしい」などと話した。

同村は平成21年に環境基本条例を制定、現在環境基本計画の策定を進めており、今後も学習会や勉強会を開催していく。

朝日新聞　H22・12・19

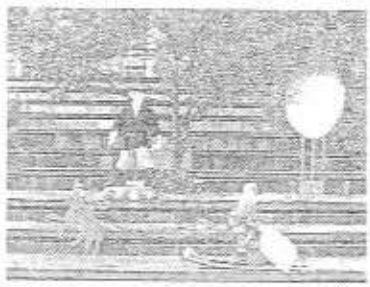
第3種郵便物認可

大和路トピックス！

川上

◆広葉樹でXマスツリー　川上村宮の平の自然教育施設「森と水の源流館」前広場に、7種類の常緑広葉樹からなるクリスマスツリーがお目見えした。吉野川源流の「水源地の森」を再現し、館員手作りの、ノコギリや弁当箱を頭に掲げた和人（かずと）のかかしやサンタクロースも配している＝写真。

村内の天然林から切り出したもので、中央の一番大きいのがツクバネガシ、周囲にヒイラギ、ソヨゴ、アセビ、サカキ、ヤブツバキ、ヒサカキが立つ。



同館は毎年12月、「川上七木」と呼ばれるスギ、ヒノキなどの針葉樹でクリスマスツリーをつくってきたが、「村の面積の約3分の1を占める天然林にも注目してほしい」と、冬でも葉が青い広葉樹に切り替えた。25日まで展示した後、正月用の門松に転用する予定だが、館員の上西由恵さんは「葉が枯れてしまわないよう祈っています」。

多彩なテーマ 地方行政学ぶ

まちづくり国際交流センター

タイから研修生受け入れ

互いの文化に触れ 国際交流を深める

まちづくり国際交流センター（橿原市四条町、吉田信二理事長）は1月25日から6日間、2日間の14日間、橿原協力機構（JICA）の青年研修事業で来日しているタイの行政官を受け入れた。研修生たちは、奈良県橿原市などで地方行政を学んだほか、環境やリサイクル管理施設の見学、学校訪問、ホームステイなどの研修を通して日本の行政や文化への理解を深めた。来奈したタイの若者たちの研修の様子を紹介する。

今回、来奈したのは、タイで地方行政に携わる20代、30代の公務員8人。またプログラムは、県庁での地方行政についての講義、荒井正吾知事を表敬訪問、橿原市での地方行政についての講義、桑下喜代表を表敬訪問、リサイクル館かしはら」「市クリーンセンター」での講義・施設見学、大和まちづくりNPO センターの吉田信二事務局長による「NPO・企業・行政の協働の取り組み」講義、奈良女子大学の藤野千代教授による「奈・歴・学の連携による『まちづくり』講義」、川上氏のもくろく館（木工芸資料館）、「奈良水の郷水族館」施設見学、大谷二行長を表敬訪問、吉野寺水道の講義・施設見学など。

研修生は、それぞれの自治体の担当者から講義と説明を受けたり、実際に施設を見学して、行政の仕組み、インフラの整備、環境保全、住民・市民との協働など多岐にわたるテーマで「まちづくり」を学んだ。

このほか、奈良県庁や橿原市の今井町の住民が町並み散策のための自主団体、岡市立今井小学校を訪問しての文化交流教室、ホームステイなどのプログラムも組まれた。日本文化を学ぶとともに各地で自国の文化も紹介して、多くの人と交流を深めた。

また、研修期間中は、奈良のため曇が晴れる日もあり、タイでは見たことのない雪を初めて体験する研修生も。積雪のあった川上村などでも喜びに満ちた。

奈良県の表敬訪問では、研修生を代表してチャウイーフン・トンプッチャーさんが一言挨拶。「奈良の歴史を学び、タイでも生かしたいとあいさつ。荒井知事も「楽しい思い出・経験へ」と、研修を通じての交流、発展につなげたいと歓迎した。

研修の最後には、期間中の感謝を込めてコメンテーターを招いたプレゼンテーションの発表があり、研修生は「地方行政」「地方自治体による公共サービス」「文化・環境の保護とまちづくり」をテーマに研修成果を発表。ブランプ・ドゥアンチャーンさんは「奈・歴・学、市民との協働で、エコ・住民文化が体験できるツーリズム型の観光資源をはかっていきたい」とタイに帰国しての計画を発表した。

コメンテーターの藤野准教授は「十年前にタイで地震っていた宿さんの姿を見たのが楽しみ」と研修生たちにエールを送った。14日間にわたり研修生を受け入れたまちづくり国際交流センターの吉田理事長は「日本を好きになっていただくことができたと思う。これからも交流を続けていきたい」と話していた。

小学生との文化交流。研修生と一緒にタイのダンスを楽しむ児童らー1月25日、橿原市今井町の市立今井小学校

ごみの分別回収やリサイクルについて学ぶ研修生らー1月26日、橿原市曽我町のリサイクル館かしはら

茶道体験（写真下、1月22日）、橿原市今井町の散策（写真左、1月23日）を通して日本文化に触れる

川上村を訪れ大谷二行長の記念館を見てる（写真上）、「奈良の水郷水族館」で記念撮影（写真右）ー1月27日

朝日新聞　H23・3・10

川上

◆「森と水の源流館」の照明がLEDに

川上村宮の平の自然教育施設「森と水の源流館」の照明器具約300基が、エネルギー効率の高いLED（発光ダイオード）電球に変わった。電気代は年間約72万円の節約に、二酸化炭素（CO_2）排出量は10・4トンの削減になるという。

同村の地球温暖化防止対策として、水源環境保全のシンボル施設の同館を省エネ化することに。2月16日から3月3日まで休館し、国の「省エネ・グリーン化推進補助金」1197万円で工事を行い、館内全体が明るくなった。

同館の尾上忠大次長は「これまで暗かった場所が使えるようになり、展示スペースが広がった。寿命が長いので電球の取り換えの手間と費用も節約できそう」と話す。同館は今月末まで、「川上村の昆虫」と題し、ギフチョウやムカシトンボなど同村の昆虫の標本や写真を展示している。同館（0746・52・0888）は水曜休館。

奈良新聞　H23・3・28

●NPO・奈良21世紀フォーラム
端材で割り箸作り
「森と水の源流館」が指南

○…川上村など吉野地域の環境保全を啓発するNPO・奈良21世紀フォーラムは、川上村の「森と水の源流館」による恒例の工作体験や、吉野杉の端材を使った割り箸作り体験などを行った。

今年初めて行った割り箸作り体験は、約30年ほど前まで行われていた道具を使って当時の手作りの方法を再現したもの。県下市製箸協同組合の3人が子どもたちに、裁断や箸の先を丸くする面取り、箸上部を彩めに切り取る大取りと呼ばれる作業を体験させた。

この日は、1人5膳ずつ作成し、2日間で約1500膳を作った。同行した下市町の割箸問屋の吉井研雄さんは「割り箸は端材を有効利用した手作りのもてなしの心。使うことで30年続にもつながります」と話していた。

割り箸作りを体験する子どもたち